【郷土史への扉】

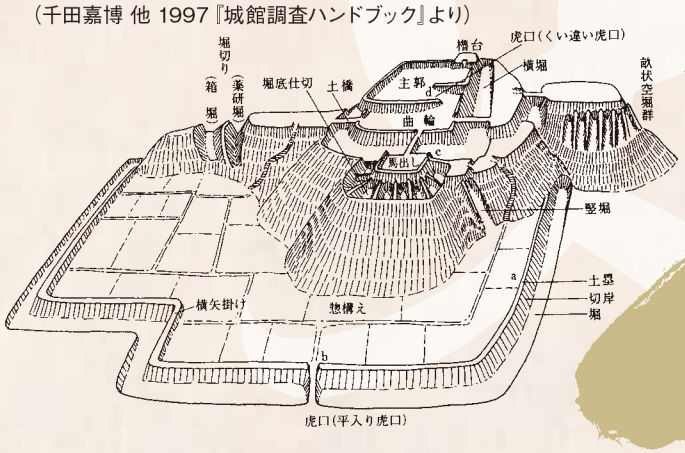
城のいろいろ【其の2】

―石垣の城―

近世の城郭の始まりとされるのが、滋賀県にある織田信長の築いた安土城です。天正四年（一五七六）から築かれ、本能寺の変の後、天正十三年（一五八五）に焼失した城です。今では特別史跡となって二〇年にわたって発掘調査が行われ、整備復元されています。ポルトガル人のルイス・フロイスも登ったといわれる七重の天主閣があったことで知られています。この城で用いられた高石垣・礎石建物・瓦葺きの三点セットが後の江戸時代の城の基本となったとされます。豊臣秀吉の大坂城では鏡石と呼ばれる一〇メートルを越す大きな石も使われ、城が防御的なものから権力のシンボルとして変わっていったのもこの頃です。

鹿児島県内で最も古い石垣の城は、屋久島の楠川城と思われます。全く加工していない石を出入り口（虎口）周辺に積み上げ、石垣も低く、傾きも緩いものです。種子島氏と禰寝氏が攻防した城で、石垣がいつ頃築かれたかは不明ですが、古い様相を残しています。石垣の積み方には、野面（加工しない石）、打込ハギ（割った石の角を合わせる）、切込ハギ（切りそろえた石）などがあり、一般的に時代差を示します。

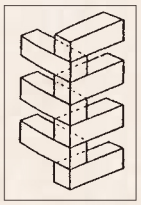
（千田嘉博 他 1997『城館調査ハンドブック』より）



県本土の石垣を持つ城としては、鶴丸城が有名です。他には姶良町の平松城や帖佐館、隼人町の富隈城、国分の舞鶴城、湧水町の栗野松尾城などが知られています。楠川城に次いで古いのが栗野松尾城です。島津義弘が築いたもので、文禄元年（一五九二）の朝鮮出兵の際に義弘はここから出陣しています。城全体はかなり大きいのですが、本丸といわれる平らな場所（曲輪）の一部を石垣で囲っています。虎口に石垣を築いて、屈曲する出入り口を設け、曲輪には建物の柱を据えた礎石があり、今でも地表で見ることができます。

次いで、三番目に古いのが隼人町の富隈城で、義弘の兄、第十六代の義久が文禄四年（一五九五）に築いたものです。義久はこの富隈城に一〇年ほど住んだ後、国分の舞鶴城に移り住み、そこで亡くなっています。義久が富隈城にいた時代は二回目の朝鮮出兵の慶長の役（一五九七年）や庄内の乱（一五九九年、家老の伊集院氏との内戦）、関ヶ原の合戦（一六〇〇年）など全国的にみても激動の時代でした。

城の石垣をよく観察すると、隅角部と呼ばれる角にある石の積み方に特徴がみられます。角は最も崩れやすいため、当時の、工夫をこらした最も高い技術が見られます。富隈城跡の角の石垣は縦長の石を使い、やや古い様相を示しています。後の時代になると隅角部は算木積みと呼ばれる、横長の石を交互に積む方法がみられ、今見かける鶴丸城の石垣のような積み方になってきます。鶴丸城は、一六〇二年から築かれ、石垣とその外側には水をたたえた堀が巡っています。また、魔物が入ってくるという鬼門の北東の角の石垣を屈曲させ、魔除けの工夫をしています。


算木積み

城を築く時はたくさんの人たちが動員されます。石垣の表面をよくみると、所々に石を割る時の、楔を打ち込んだ跡（矢穴痕）が残っており、石垣を造った石工たちの汗の結晶が観察できます。富隈城の石垣に使われた石（石材）の大半は、城のある場所、今は公園になっている稲荷山で調達されました。四阿のある公園の頂上付近には、今だに矢穴痕のある石が露出し、往時を偲ぶことができます。

文責＝重

石垣矢穴痕
（富隈城跡）

富隈城跡の石垣